

## CHOSHI (第13話)

令和2年2月、新型コロナウイルスによって全国の学校が一斉休校になった。そして4月、学校が再開されるも、3日後再び長い休校期間に突入した。押見は学校が休校期間に入る前日、3人だけの中学野球部員を入試広報室に呼んだ。

27年間、押見は中学野球部の顧問をしていたが、始めの2年以外はずっと副顧問だった。しかし、この4月から主顧問(監督兼部長)になった。正直、入試広報部長をしながら一人で野球部の顧問するのは無理だと思った。しかし、ある出来事が遠い昔の記憶を思い出させた。

『甲子園大会中止』そのニュースを聞いた夜、大学生に戻った夢を見た。卒業式前日、大学の準硬式野球のチームメイトから将来の夢を聞かれて『甲子園に行きたい』と答えたことを思い出した。

『夢は叶う。嘘と思わば、甲子園に聞け。』

あの時、川口(兄)がシニアに行っていたら……、もし翌年、中学野球部員2名が入部しなければ……、きっと中学野球部はなくなっていただろう。

新型コロナウイルスは球児達から夏の大会も奪い、令和2年は中止。翌年(令和3年)の夏の大会は開催されたが、応援団・チアガールなどの生徒応援は禁止。川口(兄)と同学年の高校球児2人は、夏の大会の雰囲気を経験することのないまま、高校2年の秋を迎えていた。

そんな中、清真学園高校野球部に中学県選抜に選ばれた投手が入部した。

川口颯大。川口翔平の弟だ。正直、県選抜の投手となれば私立の強豪校から誘いがきてもおかしくない。例え誘いがなくても、入部を希望すればきっと受け入れてくれるだろう。しかし、弟は兄のいる清真を選んだ。

さらに新入部員は増え、新高校1年生はマネージャーを含め6人になった。

令和4年6月。サッカー部主将で最後の大会を終えた、清真中野球部で4番を打っていた横山、鹿野中時代シニアで野球をしていた武衛、安藤の3人の高校3年生が加わる。清真学園高校野球部は選手11人、マネージャー2人になった。

部員が揃ったことで、夏の県大会に単独チームで出場することになった。エースは川口颯大だが、受ける捕手は今までは合同チームの選手だった。

兄の川口翔平はずっとショートを守っていた。しかし、この状況で川口颯大の球を受けるのは兄の翔平しかいない。

川口翔平はキャッチャーの防具をつけた。夏の大会まで1ヵ月。清真学園史上初の兄弟バッテリーの誕生だった。